

アマゾンの浦臼

紺谷充彦

\* 登場人物  
孝史(29) カメラマン志望の青年  
クリス(22) アマゾンに住む女子大学生  
老人 クリスの祖父  
村の人々

S E 汽笛、船のエンジン音

船内のざわめき（ポルトガル語）

クリス「オジサン、日本から来た日本人？」

孝史「はあつ？ そうだけど……。でも、日本からって。日本人はどこから来ても日本人だろ。それに、オレ、『オジサン』じゃないよ」

クリス「あつ、ごめんなさい。あたし、日本の日本人に会うのが初めてなんで」

孝史「えっ？」

クリス「あたし、今、船が泊まっていたところ、この町サンタレンの大学に通っているんだけどね。アマゾンから出たことがなくて。それで、ここでは、あたしたちも周りのブラジル人から『日本人』って、呼ばれているの。だから、オジサンみたいな日本人をなんて言えばいいのかわからなくって」

孝史「ちよつと、その『オジサン』って言うの止めてくれない。オレはまだ、三十歳にもなっていないんだからね。もうちよつとでなるけど」

クリス「うーん。村の日本語学校では、あつ、村ってあたしが生まれた場所ね。だいたい週末にはこの船で村に帰るのよ。えつと、その学校ではね、TIO（チオ）は『オジサン』って習ったのよ。ブラジル語では、年上の男性ならみんなTIOなんだけどなあ。じゃあ、日本の日本語な

ら、なんて言えばいいの？」

孝史「そう言われると困るなあ。お兄さんでもヘンだし。あなた、君、オタク……。でもないよなあ」

クリス「じゃあ、名前は？ あだ名でもいいよ」

孝史「山村孝史だけど」

クリス「じゃあ、タカシね」

孝史「なんか、そうやってファーストネームで呼ばれると照れるなあ」

クリス「どうして？ ここじゃあ、みんなこうよ。あたしは、クリスチーナ、みんなはクリスって呼ぶけど、クリスチーナでもクリスでもどちらでもいいわよ」

孝史「それに、クリス。いま日本語学校って言ったよね。こんなアマゾンの奥地に日本語学校があるの？ それに、クリスみたいな日本人が、この辺りにたくさんいるわけ？」

クリス「あたし、おじいちゃんの話や学校で聞いたことしか知らないんだけど。昔、たくさんの日本人が日本から船で、このアマゾンに来たんだった。大人だけでなく、子供も大勢いたから、だから日本語学校もあつたの」

孝史「そんなの……。オレ聞いたことねえな。どうして？」

クリス「なんか……。日本は狭いから、貧乏だからだつて。えつと、学校では『新しい土地を求めてやってきた』って、先生は

言ってたけど。おじいちゃんには、追い出されたとか、捨てられたんだとか、いつも言っているの。とにかく、ずっと昔の話よ」

孝史「日本が貧乏？ 分かんないなあ」

クリス「じゃあ、タカシは、どうしてこの船に乗っているの？ どうして日本を出てアマゾンにやってきたの？」

孝史「オレの場合は、旅というか。まあ、日本での生活が息苦しくなったからかなあ。会社を辞めたからだな」

S E 風の音、水しぶきの音

クリス「あつ！ 見た見た？ あれBOTO（ボト）よ。ほら、また跳ねた」

孝史「えつ、なに？ 魚なの？」

クリス「魚じゃなくて、BOTOよ。BOT COR DE ROSA（コール デ

ホーザ）。えつと、日本語だとピンク……。イルカかな。そうピンクイルカよ」

孝史「イルカ？ ここは河だよ。イルカは海にいるんじゃないの？」

クリス「よく分からないけど……。あれは、ピンクイルカよ。あれを見られたら素敵な出会いがあるの」

孝史「どうして？」

クリス「言い伝えがあるの。あつ、ほら、また跳ねた。三匹もいるわ！ すごい。あつ、ごめんなさい。イルカのお話よね。」

満月の夜にね、イルカはハンサムな青年に化けるのよ。青年が微笑むと、村の女性のみんな、彼のことを好きになつてしまふの。それにしても、三匹も、この船に付いて来ているわ」

孝史「へえー、そんなに珍しいのなら、写真に撮らなくっちゃ」

SE シャッター音(連写)

クリス「タカシ、それ凄いかメラねえ。そんなカメラをいつも持ち歩いているの？」

孝史「ああ、これ。これはニコンのDシリーズなんだけど、オートフォーカスの反応速度が素晴らしいんだ。分かる？ 反応速度って？」

クリス「あたし、難しい日本語は分からないの」

孝史「まあ、こんな話、普通女性は興味ないよね。オレさあ、本当はカメラマンになりたかったんだよね。高校時代は写真部にいたんだ。北海道の田舎の高校でさあ、何にもない所でさあ、出たくて出たくてしようがなかったから、卒業してすぐに東京に出て働いたんだあ。そんなときは、金貯めて写真の学校に行こうと思ってたけど」

クリス「タカシ！ 北海道なの？ ねえ、北海道のなんて村？」

孝史「浦臼なんだけど。知らないでしょう」

クリス「知っているわ。ウ、ラ、ウ、ス、浦臼よね。石狩川が流れていたんでしょ。

カバト山が見えて」

孝史「へえー、よく知っているねえ」

クリス「おじいちゃんが生まれた村よ。いつも言っているもの」

孝史「そう。偶然だね。そしたらさあ、オレたち、もしかしたら親戚かもしれないね」

クリス「そうよ。そうよそうよ。じゃあ、あたしたち、血がつながっているのね。感動だわ」

孝史「それよりさあ、このカメラで、クリス、君を撮っていい？」

クリス「いや！ いや。あたしものすごく写真写りが悪いのよ」

孝史「いいじゃないか。クリスの横顔と、背景のアマゾン河、ものすごく絵になると思うんだよ。なあ、頼むよ。キレイに撮るから」

クリス「ダメ、ダメ、絶対ダメ」

孝史「なあ、お願いっ」

SE ピンクイルカの鳴き声、跳ねる音

クリス「ほら、また跳ねた。あれ、あれを撮って」

孝史「まあ、いいか」

SE シャッター音(連写)

川風の音

クリス「ねえ、タカシ、あたしの村に来る？」

孝史「村に？」

クリス「そうよ。ねえ、おじいちゃんに今の浦臼の話をしてあげて。おじいちゃんを喜ばせたいの」

孝史「でも……船の切符はベレンまでだし……」

クリス「大丈夫よ。途中で降りても構わないのよ。あたしが話してあげるわ。気分が悪くなつたから次の船で行くからって言えば問題ないもの」

孝史「遠いの？」

クリス「あと、二時間ほどでサンベントつていう小さな港に着くわ。そこから馬車で一時間ほどよ」

孝史「馬車？ バスじゃなくて」

クリス「馬車よ。馬さんが引いていくのよ」

孝史「まあ、そうだなあ。それも面白そうだし、なんかいい絵が撮れそうだな」

孝史(M)「オレは頷いた。その瞬間のクリスの笑顔は最高だった。この笑顔だ。なんとしても写したい」

SE 港のざわめき

クリス「着いたわ。ほら、タカシ、あれ、あ

の馬車に乗るのよ、ほら、みんな乗っているし、もう出発しちゃうよ。早く早く、カメラはもう仕舞って」

SE 馬のいななき

孝史「本当に馬車だな。マジかよ」

SE 馬車の走る音

乗客のざわめき（ポルトガル語）

クリス「タカシは馬車に乗ったことがないの？」

孝史「日本じゃ、もう走っていないよ。観光用とかにはあるけど」

クリス「ここじゃ、普通なんだけだなあ」

孝史「アマゾン奥地の日本人村かあ、なんかワクワクしてきた。いい絵が撮れそうだよ。なあ、村には店とかあるの？」

クリス「食堂ならあるわよ。『中村食堂』って言うんだけど。うどんが美味しいのよ」

孝史「うどん。いいね。脂っこいブラジルの食べ物には飽き飽きしていたからな。やつぱり日本食が食べたくなるよなあ」

クリス「あと……村にある店って、雑貨屋さんつと、洋服屋さんかな」

孝史「レトロだね。食堂に、雑貨屋と洋服屋かよ。なんかいいね」

クリス「それに、あたしの通っていた日本語

学校があつて……」

孝史「あつ、ひえー、この辺りも携帯電話の圏外なの。船の上じゃしようがないと思つていたけど。一応町でしょう。ここ。人が住んでいるんでしよう。なんで、パラボナとか立っていないの」

クリス「携帯電話どころか、普通の電話も電氣も来ていないわよ。ほら電線と電柱とかないでしょ」

孝史「本当だ。ないね。あつ、おい、あれ、あの沼、月沼にそっくり。オレの実家の近くにあつて、子供の頃、いつも釣りに行つたんだよ。本当、似ているよ」

SE シャッター音（連写）

クリス「ねえ、タカシ、カメラなんだけどね。おじいちゃんにだけは向けないでね。すつごく嫌いだからね」

孝史「ああ、分かつたよ。それより、ここ、ここで馬車を止めてもらつていいかな。あそこからの構図、たぶん絶妙だと思うんだ。ちよつと頼んでよ。クリス」

クリス「ほんのちよつとだけよ。他のお客さんたち、みんな急いでいるんだから。それに、暗くなると毒ヘビが出るんだからね」

孝史「ほんの一分だけ。それにまだ暗くないよ」

SE 御者が馬車を止める

馬車から降りる、駆け出す音

クリス「ねえ、タカシ。もう出発しなくちゃ。みんな怒るわよ。ねえ、早く」

孝史「もう一枚、もう一枚だけだからあ」

SE シャッター音

馬のいななき

馬車が発発する

孝史（M）「緑の地平線に夕焼けが映え出した頃、やつと到着した。閑散としたこの村が終点であり、そこまで乗っていたのはオレたち二人だけだった。日本食に飢えていたオレは、まず中村食堂でうどんを食べようと思つていたのに、クリスが『おじいさん』、『おじいさん』とばかり言うものだから、おじいさんの小屋に行くことになった」

SE 木製の古いドアを開ける

クリス「おじいちゃん。ただいま」

おじいさん（以下おじい）「おお、クリスチーナ」

クリス「おじいちゃん。彼はね、タカシよ。北海道、浦臼の生まれなんだって！」

おじい「そうか。こんな所まで、よくいらつしやつた。そうかそうか。まあ、まあ座

って下され」

SE イスのきしむ音

おじい「クリスチーナ、茶をお出ししなさい。それとも、あんた、ビールでも飲まれるのかの？」

孝史「いや、あのつ、お茶で……」

孝史(M)「いつたい、このじいさんは何歳なんだ？ クリスの祖父であるというのだから、たぶん六十代か七十代のはずなのだが、その深い皺はどうみても九十歳ぐらいだ。ただ、声の張りや動作から察すれば若い感じはした。じいさんは、そのしつかりした声で問い質すように、今の浦臼の村長は？ とか、小学校の校長は？ など、村のことをいろいろと聞いてきたが、そのほとんどもオレは答えることができなかった」

おじい「それじゃあ、あんた。この村を見てどう思った？」

孝史「なんていうか……、レトロというか、懐かしいというか」

おじい「そうじゃろう。ここは、浦臼と似ているじゃろ。村から五家族、一緒に出てきてのお。ここを分村にしようって決めたんじゃ」

孝史「ブンソンって？」

クリス「村を分けてねつ、別な場所に新しい村を作るのよ」

おじい「わしのじいさんも土佐からやってきて浦臼に分村を作った。だから、わしもそれをアマゾンでやったんじゃよ」

孝史「どうして、こんなところに？」

おじい「石狩川の氾濫が酷くてのお。それに、わしには兄貴が二人いたからの、田んぼを分けてもらえなかったし。わしの頃には、北海道でも、もう土地はなかった。だからこんなアマゾンの奥地まで来ることになったんじゃが……、ここは緑の監獄じゃった。そのうえ、マリアだのアーバー赤痢だのバタバタ死んでいく。骸になると、あつという間に腐るから、すぐに焼かんといかんでのお、酷いときは、その煙りが絶えなくて」

クリス「おじいちゃん。おじいちゃん、タカシは今の日本の日本人なのよ。昔の話は分からないわよ」

おじい「じゃ、あんたつ、名前は？」

孝史「山村孝史ですが」

おじい「山村、山村……、はて、あんたあ、中村さんは知らんか？ 中村栄作さんよ。その家の美代さんは？ それに、その隣に住んどった小野寺さん、確か名前は……伸介じゃったかの」

孝史「いつたい、いつの時代のことですか？ オレは……」

クリス「タカシはね、日本から来たばかりなのよ」

おじい「そうか。昔の話か……、もう誰もおらんのか」

SE おじい、お茶をすする

孝史(M)「じいさんの話は、ぜんぜん意味分かんなかったが、じいさんの表情には興味を惹かれた。苦労がにじみ出しているようなその顔。絵になる！ 間違いない。いい写真が撮れる。オレはそう直感した」

SE バッグからカメラを取り出す音

孝史(M)「クリスから写真を撮るな、と釘を刺されていたが、オレはカメラの誘惑に勝てなかった。これは最新のデジタルカメラだから、スチールカメラと違ってフィルムに焼き付けるわけではないからと、勝手にこじつけた」

孝史「写真、撮っていいでしょ？」

孝史(M)「そう言いながら、オレはすでにカメラを向けていた。了解を取ったフリをして写してしまえば、あとはなんともなる」

クリス「やめて！」

孝史(M) 「フラインダーを覗いた。しかし、じいさんが映っていない。えっ？ 眼をカメラから離す。直接じいさんを見た。じいさんが笑っている」

孝史「あつ！」

孝史(M) 「じいさんの口が、裂けていった」

SE シャッター音(ゆっくり)

孝史(M) 「目の前が真っ暗になった。へっ、周りにたくさんの人がいる。みんなこちらを見つめている。なに？ いったいいつの間にこんなに現れたんだ」

村の人々「おうほほほほ」

孝史「何なんなんだよ」

SE 人々のざわめき、笑い声

村の人々「バンザーイ！バンザーイ！万歳！三郎さん、ついに帰郷が果たせませぬ。万歳！バンザーイ。三郎さん、おめでとう」

孝史「クリス、クリス、なんなんだ！これは」

クリス「タカシ、ごめんなさい。こうなつては仕方ないわ。タカシがおじいちゃんのだわりになったのよ。おじいさんは解き放たれて、タカシがこの村に残らなければならなかったの」

孝史「なんで？」

クリス「誰か浦臼の血を引いている人が必要なの。だって、誰もいなくなれば、みんなの苦労が消えてしまうんだもの」

孝史「バカな。そんな」

SE ドアを開ける

孝史(M) 「オレは周りの人々を押しつけて、小屋の外に出た。人通りがなかったはずの町に、活気が溢れている。人々が行き交い、雑踏が耳につく。緑の地平線に囲まれていたはずなのに、どこかで見たような山が夕日に照らされていた」

孝史「あれは……ウラウス山？へっ？ここはどこ。さっきの場所とは違うぞ。どこなんだ？おい」

クリス「ここは、タカシの心の中にある故郷よ。みんな、自分の中の風景から出られないのよ」

SE 町のざわめき

孝史(M) 「オレは走り出した。馬車で来た

道を辿って、あの港に向かった」

SE 走り続け、バッグが揺れる

孝史「そんなはずはない」

SE 息切れ

孝史(M) 「確か、ここのはずだ。どうして道が途切れているんだ。どうして、この先はジャングルになっているんだ？おかしい。間違いないはず。あそこに月沼がある。あれだ。ここに来る時に写真を撮っていたんだ。ここのはずなのに……」

SE 木々の揺れる音、風の音  
サルの鳴き声

孝史「そんなはずは」

SE 草をかき分ける

孝史「この向こうに、道が……あるはず」

SE 草を踏む音、枝を折る音  
息切れ  
何かが擦れるような音が聞こえてくる

孝史「なんだ？」

SE 擦れる音（はつきりと）

孝史「ど……毒へび」

SE 草をかき分けて走り出す

息切れ

小屋のドアを開ける音

クリス「タカシ、もう出られないのよ」

孝史「オレたちが馬車で来たあの道が、無くなってきているんだ。なぜだ？ あの道に間違いはない。あの脇にあった月沼、ほら、このカメラにもしつかり写っていたぜ。」

どうしてなんだ」

クリス「無理よ。みんながタカシを引き止めているんだもの」

孝史「オレは、そんなたわ言を信じないぜ。」

明日の朝、もう一度、あの場所に行ってみる。道があるはずだ」

クリス「そうね。信じてもらえないわね……タカシの好きなようにやってみて」

孝史（M）「結局、クリスの言ったとおり、この村から出られなかった。道が途切れていた場所から、ジャングルの奥に入ってみたが、迷っただけだった。半日歩き回って、やっと出たら、そこはもとの村だった」

SE 町のざわめき

孝史（M）「クリスを含め、村の誰に聞いても『無理だよ』としか返ってこない。くまなく村を回ってみたが、外に通じる道はなかった。電話すらないので、外部と連絡もとれない。この村に来たときの馬車を待ってみたが、それも現れなかった。まさに、緑の監獄だった。出たい。出たい。ここを出て日本に、いや浦臼に帰りたい。そんな想いが募る一方だったが、どうしようもないまま、一週間が過ぎていった」

SE ふくろうの鳴き声

孝史（M）「深夜、オレが老人の小屋で眠っていたとき目覚めた」

SE 擦れる音（へびの音に似ている）

だんだん音が近づいてくる

孝史（M）「なんだ？ あの音は。ジャングルが押し寄せてくるようなあの響きは。いったい何なんだ。オレは窓から外を覗いたが、闇が見えるだけだった。確かに外から聞こえているはずだが……いや、もしかすると幻聴なのか。ついに、オレが壊れてきた音なのか？」

SE 不気味な音に交って、ドアを叩く音がする

孝史「誰？」

クリス「開けて」

孝史「クリス？ 何なんだよ、あの音は？ 聞こえるだろ」

SE 獣の鳴き声のようにも、笑い声のようにも聞こえてくる

クリス「やっぱり、タカシにも聞こえるのよね」

孝史「なんなんだよ」

クリス「笑い声よ」

孝史「笑い声？ 動物の？」

クリス「違うわよ。人間よ。おじいちゃん……ついにやったのね。よかったわ。おじいちゃん、会えたのよ。初恋の人に。美代さんって人に。そして、彼女の笑顔を見たんだわ。タカシ、あなたもこれで、戻れるわよ」

孝史「どうして？ どういうことなんだよ」

クリス「おじいちゃんの顔、タカシも見たでしょ。おじいちゃんの生活には笑いがなかったから、あんな顔になったのよ。北海道でもアマゾンでも、苦労ばかりで……だからね、辛いときには、初恋の人の笑顔をいつも思い出してたんだった。」

死ぬ前に、その人の笑顔をもう一度見た  
いって、いつもその話を聞かせてくれた  
わ。だから……タカシに代わってもらっ  
てまで」

S E 老婆の笑い声

孝史「そんな」  
クリス「ほら、はつきりと聞こえるでしょ」

S E 老婆の笑い声から、クリスの笑い  
声に変わる  
シャッター音（ゆっくり）

孝史（M）「ピンクイルカがファインダーに  
入っていた」

S E 船のエンジン音  
イルカの跳ねる音

クリス「あつ、ほら、また跳ねた。三匹もい  
るわ！ すごい。あつ、ごめんなさい。  
イルカのお話よね。満月の夜にね、イル  
カはハンサムな青年に化けるのよ」

孝史「はあ？ ここは？」  
クリス「青年が微笑むと、村の女性はみんな、  
彼のことを好きになってしまうの。それ  
にしても、三匹も、この船に付いて来て  
いるわ」

孝史「えつ、ピンクのイルカ……イルカに化

かされたのか……」

クリス「ねえ、タカシ！ 聞いているの？  
分かったの？ イルカのお話」

S E 川風の音 汽笛の音

孝史（M）「クリスの横顔と背景のアマゾン  
河、素晴らしい絵になると思った。でも、  
オレはレンズを向けなかった。オレはク  
リスの笑顔を見つめた。その表情、笑い  
声、オレは心のフィルムにそれを焼き付  
けた。オレの中に刻まれている浦臼の風  
景と同じように」

S E イルカの跳ねる音

（完）